

報告書：ワークショップ「インドネシアにおけるカトリック教会と国家」

[文責] 織田悠雅（地域研究専攻博士前期課程2年）

去る11月4日、上智大学図書館にて学内外から20名程度の参加者を迎えて、ワークショップ「インドネシアにおけるカトリック教会と国家」を開催した。ワークショップは映画鑑賞と研究発表の二部構成で行われた。第1部の映画鑑賞では、インドネシアで現地人初の司教として活躍したスギヤプラノトを題材にした映画"Soegija"（邦題：『スギヤ』）を鑑賞し、1940年代のインドネシアの騒乱社会におけるカトリック教会について理解を深めた。映画の中では、カトリック教会とナショナリズムというテーマにとどまらず、インドネシア社会に横たわる人種問題をはじめとする社会問題も扱われており、参加者にとってはインドネシア社会への解像度を高める機会になった。

第2部では、インドネシアのカトリック教会とナショナリズムというテーマの下で3つの研究発表が行われた。最初の発表者である織田悠雅（上智大学大学院博士前期課程院生）は、現代とスギヤの時代を比較し、それぞれの時代におけるカトリック教会をめぐる厳しい社会状況を整理しつつ、カトリック教会がインドネシア・ナショナリズムを支持しつつも教会内には多様な意見があること、さらにマイノリティを取り巻く厳しい状況に対してナショナリズムが抱えている限界について明らかにした。次に李光平（上智大学大学院博士前期課程院生）は、独立記念日ミサというインドネシアに見られる独特の典礼について、社会背景や典礼の内容を紹介しつつ、カトリック信徒の目の前にナショナリズムが典礼という形でどのように立ち上がり、教会の言説として再生産されていくのかについて議論した。最後の発表者である柴山元（京都大学大学院一貫制博士課程4年）は、自身の調査地である台湾におけるインドネシア人のキリスト教コミュニティの活動について、現地調査を基にしてコミュニティ形成過程とその活動内容や人々の社会関係を紹介し、台湾におけるインドネシア移民の移民時期やバックグラウンドなどの違いを超えたところにある「インドネシア」を軸にした人々の紐帯を問う発表を行った。これらの発表は、インドネシアのカトリック教会を軸にしつつも、多角的な視点からインドネシアにおける政教関係やナショナリズム論へと迫るものであった。

その後の総括コメントにおいて、コメンテーターとして迎えた福武慎太郎教授（上智大学）は、自身のインドネシア・ジョグジャカルタへの留学経験をもとにムスリム多数派社

会インドネシアにおいて、数的にはマイノリティであるカトリック教会の社会における大きな存在感や生き生きとした信仰実践の在り方について説明を行った。そして、それぞれの発表に対して、ナショナリズムの歴史的な変化や多義性をめぐる問題、発表者のナショナリズムのとらえ方に潜む問題、インドネシア社会における華人問題を踏まえた台湾におけるキリスト教コミュニティ形成の問題についてコメントを行い、発表者との間で活発な議論が行われた。

今回の開催目的は、1) インドネシアのカトリック教会について広く周知してもらうこと、2) インドネシアのカトリック研究を盛り上げるきっかけにしたいということ、という2点であった。今回のワークショップを通じてその目的を果たすことができた。これまでのインドネシア宗教研究は多数派イスラームや民間信仰への関心が集中し、カトリック研究はその中では比較的マイナーな研究テーマであった。しかし、福武先生のご指摘にあったように、カトリック教会は少数派ではあるものの社会の中で大きな存在感を持っており、企画者はインドネシアにおける宗教を総体的にとらえるためにはカトリック研究は欠かせない分野であると考えている。そしてそれが今回のワークショップ開催に至るまでの問題意識であった。そのため、今回のワークショップがカトリック研究の活性化の起爆剤となり、インドネシア宗教研究の更なる深化につながることを期待している。

最後になってしまったが、コメンテーターを快く引き受けてくださった福武先生、今回のワークショップ開催を全面的にサポートしてくださった研究科の皆様に心からお礼を申し上げます。